

ドイツにおける中世と近代の運動祭について

On the Sportsfestivals of the Middle Ages and Modern times in Germany

松 尾 順 一
MATSUO Junichi

はじめに

今日のドイツにおける最大の娯楽祭は、毎年9月の中旬から10月の上旬にかけてミュンヘンで開催される“オクトバーフェスト”である。また、ドイツにおける最大の体操・スポーツ祭は、ドイツ体操同盟 (Deutscher Turner-Bund) が4年に一度主催する“インターナショナル・ドイツ体操祭” (Internationales Deutsches Turnfest) である。さらには、ドイツ各地で春から秋にかけて頻繁に開催されるのが、射撃クラブが開催する射撃祭 (Schützenfest) である。この3つの祭典は、今日のドイツを代表する祭典であるといっても過言ではない。これらの祭典で共通する点は、娯楽的要素が前面に押し出されているところである。今後のこれらの祭典の在り方を検討する際、まずはそれぞれの祭典の原点に立ち返り、それぞれが果たしていた社会的な機能を明らかにする必要があるといえる。

そこで本考察では、中世の代表的な祭典である射撃祭と、近代の国民教育の手段としてのドイツ体操祭と、運動競技と産業振興が融合したバイエルン王国の国民祭 (Volksfest) に焦点を当てることにする。

ここで取り上げる「祭典」とは、Festのことである。Festの語源は、ラテン語のfestumであり、Festの同義語であるFeierの語源であるferiaeと同様に、原点は、宗教的なもの (Religiöse) を意味した。今日、Festは、以下のような意味を有している。(Brockhaus Enzyklopädie, Bd., 15)

1. Festは、期間中、日常的な活動が中止される非日常的活動である。
2. Festの中には、日常的な活動が凝縮されており、また日常生活の重要な構成要素である。
3. Festは、時代や時期を区分し、区切られたそのサイクルのなかで人間は生活を充実しようとする。
4. Festは、日常とは異なる高揚した情緒 (喜び、熱狂、興味) を伴い、またその根底には、乱暴、無秩序、放縦などが存在する。
5. Festは、大規模な場合、費用のかかる一種の浪費である。
6. Festは、行列やダンスや演劇や競争などを通し、外に向けての示威的な面を持つ。
7. Festは、権力の示威運動としてや支配を保証する道具として利用される。
8. Festの中には、革命的なポテンシャルや決起などを内在することがある。

また、Festは、歴史的にみると、「啓蒙の時代に入ると、教育的局面が前面に押し出され、国民教育的な意図を持つ新しいFestが形作られ、さらには、この時代の重農主義の影響のもと、オクトバーフェストのような、畜産や農業上の諸成果の展覧機能を持つFestが誕生した」と言われている。

つまり、前者が、F.L.ヤーンより国民教育の手段として位置づけられた体操祭 (Turnfest) であり、後者は、運動競技と産業振興が融合したバイエルン王国の国民祭 (Volksfest) である。この近代を代表する祭典である体操祭と国民祭は、チャーシャンクの著書『射撃祭から体操祭へ』というタイトルからもわかるように、中世の代表的な祭典である「射撃祭」から多くの要素を受け継いでいたといえる。

これらの祭典では、それぞれ定められた特定の日に多くの人々が祭典空間の中に呼び寄せられ、そこで展開されるプログラムをとおり、喜びや興奮や熱狂などを伴う非日常的体験が共有された。このような参加者の非日常的体験の社会への発信をとおり、それぞれの祭典は、社会的機能を有していた

といえる。つまり、祭典は一つの社会的機能を有する「装置」であり、その装置の中には、プログラムを含め各種の「仕掛け」が組み込まれていた。

このような視点のもとに、本考察では、中世の射撃祭と近代のドイツ体操祭と国民祭を一つの「装置」としてとらえ、その中でどのような仕掛けが展開されたのかを論究し、その上で、それぞれの祭典の特質や、それぞれの祭典の関連性を明らかにする。

I. 中世の射撃祭

1. 射撃家組合の結成

射撃家組合（Schützengesellschaft）は、13世紀の末、今日のオランダ南部とベルギー北部とフランス北部にまたがるフランドル地方に誕生した。このフランドル地方では、毛織物業を中心とした商業と経済が発達し、ヨーロッパの先進地域であった。そのため、イギリスとフランスの君主たちは、この地の伯爵の地位をかけて頻繁に戦い、またこのフランドル地方に住むフラマン人は、常にフランスと敵対関係にあった。このような状況であったため、この地方の人々は必然的に射撃具に関心を示すようになり、自衛義務のあった中世都市において、まず、取り扱に基本的な訓練が必要な「弩」の射撃家組合が結成されるに至った。この弩射撃家組合は、このフランドル地方から近隣地方へと普及拡大し、1400年ごろには北オランダやドイツのランラント地方においても弩射撃家組合が結成された。それぞれの都市における射撃家組合の結成時期と、手工業者が商人を中心とした市参事会に対し各種の諸権利を求め戦った「ツunft闘争」の時期が一致している。このことは、弩などで武装していた手工業者の組織が、ツunft闘争の結果各種の権利を得る中で、弩射撃家組合が公認されたことを示している。



<写真-1> 1316年創設の射撃クラブの現在の射撃祭とその祭典行進

射撃具の種類からみると、まず結成されたのが「弩」射撃家組合であり、続いて14世紀が経過する中で「弓」射撃家組合が組織され、最後に、携行武器としての火器が出現する中で、15世紀の初頭に「銃」射撃家組合が誕生した。

2. 都市・領土防衛と射撃家組合

中世都市は、国家の中の国家といわれるように、「自治」を獲得していた。例えば、「都市の空気は自由にする (Stadtluft macht frei)」という諺があったように、例えば農民が、都市に入り、1年と1日都市で生活すると、その農民は都市民として認められ、保護を受けることができた。このように中世都市は自治をもっていたが、その反面、都市民には自衛義務が課せられていた。そのため、領主などの攻撃から都市を守るために、中世都市は高い市壁に囲まれていた。ドイツ語の市民 Bürgerは、(城塞) Burgに (住む人) erという意味である。



<写真-2> ローテンブルクを囲んでいる中世の市壁

射撃家組合は、自衛義務のあった中世都市の特別な防衛部隊として組織されたと判断されることがこれまで多かったが、実際に都市が危険にさらされたときや、当該領主から従軍要請があったとき、組合の会員たちは、一つのまとまった固有の部隊としてではなく、都市民より編成された街区やツンプトごとの一般部隊の中に一市民として混じり都市・領土の防衛にあった。会員の中で軍務が義務づけられてのは中核会員であり、その中核会員数は、一般に30名から50名程度であった。この程度の中核会員数では、都市や領地防衛を担う戦闘部隊として機能することは不可能であり、また、実際の戦闘では、射撃具以外の剣や槍等の武器も当然必要であり、武器として限定された効力しか有していない射撃具だけでは、すべての軍事的課題を担うことはできなかった。つまり、中世都市においては、都市防衛を担う固有の部隊として射撃家組合を組織する必要はなかったのである。

3. 都市主催の公開競射会 (Freischießen)

ドイツの中世都市においては、都市の全住民を対象とした武器訓練は行われていない。しかし、射撃家組合の会員には、射撃訓練が義務づけられていた。射撃訓練は、だいたい日曜日に行われ、会員たちは、1週間や2週間間隔で射撃場に集まり訓練を実施した。この訓練に際し、会員たちは10名ぐらいの単位に分けられ、そのグループごとに指定された練習日を持っていた。射撃訓練の目的は、以下の3点である。

- 1) 娯楽や気晴らし
- 2) 武器取り扱いの訓練
- 3) 都市・領土防衛

このような目的で行われた射撃訓練の日頃の成果を競うために、それぞれの射撃家組合は、その年の射手王（Schützenkönig）を決めるために競射会Königschießenを開催した。

この競射会は、年に一度、ほとんどが聖霊降臨祭後の第一月曜日に行われた。時代的にまず行われたのが、弩による鳥形標的（Vogel）への射撃であった。この鳥型標的は、棒の上に固定され、この標的をその原型のまま射落した者か、最後に残った標的の木片を射落とした者が勝者となった。その後、15世紀ごろから、改良され使用しやすくなった銃による競射が行われるようになり、それに伴い、標的も円形標的（Scheibe）が登場した。それ以来、Königschießenでは、弩による鳥形標的への射撃の勝者Vogelkönigと、銃による円形標的への射撃の勝者Scheibekönigが誕生し、それぞれの勝者には、各種の賞品や漁労権や狩猟権や免税などの諸特典が付与された。

以上のような射撃家組合の会員に限定されたKönigschießenの他に、14世紀の末ごろから、近隣都市の射手や一般の人々にも参加の道が開かれた公開競射会Freischießenを都市が主催するようになった。中世都市は、この時期、より経済的な発展をめざし、他の諸都市との通商を活発化させた。そのためには、自衛義務のあった中世都市にあっては、他の都市との友好関係を築く必要に迫られた。つまり、他の諸都市との友好関係を進めるための「装置」が、つまり「公開競射会」が必要となったのである。

この公開競射会には、開催都市の射手だけではなく他の都市の射手も多数参加しており、例えばアウグスブルクで開催された公開競射会では、1441年は外部からの射手140名地元の射手52名、1470年は外部からの射手406名地元の射手54名、1476年は外部からの射手300名地元の射手117名であり、1581年にケルンで開催された公開競射会では、外部からの射手205名地元の射手約140名であった。

このような公開競射会には、多くの人々を引き寄せたための仕掛けが、次のように組み込まれていた。

- 1) 勝者には、多額の賞金や賞品が授与された。1470年のアウグスブルクの競射会の第1位の勝者には100フローリンが授与され、当競射会の賞金総額は、916フローリンに上った。
- 2) 各都市は、派遣する射手には、路銀を用意した。1426年レーゲンスブルクは、6名の射手を派遣し、その路銀とし36ポンドを支出した。また、1482年ラントシュツは、10名を派遣し、それぞれに4フローリンを用意した。それぞれの都市で路銀を用意することにより、射手間の派遣が容易にできるような仕組みとなっていた。
- 3) 射撃競技以外にも参加者に多くの楽しみを与えるために、走・跳・投などの運動競技をプログラムの中に組み込み、これらの競技の勝者にも、賞品や賞金が授与された。例えば、1472年のチューリヒでは、600歩の距離の競走、立ち幅跳び、両足踏切での幅跳び、三段跳び、石投げが行われた。この運動競技に参加できたのは、それぞれの組合に所属する会員つまり射手だけであった。
- 4) 公開競射会では、このような射手のみに限定されたプログラムの他に、すべての者に参加の道が開かれていた各種の娯楽が行われた。例えば、競馬、羊競走、手押し車競走、下僕の競走、九柱戯、幸運の壺と呼ばれた籤、演劇、ダンス、剣術やレスリングのデモンストレーションなどが行われ、このような娯楽においても賞品や賞金が与えられた。

公開競射会のプログラムとして組み込まれた各種の娯楽が、特に、多く人々を射撃祭に引き寄せる吸引材として機能したのである。

以上のような仕掛けにより、公開競技会には射撃家組合に所属する射手以外にも多くの一般庶民も参加し、中世後期の“市民たちの大運動会”と称されるような様相を呈するようになった。例えば、1394年のトゥルナイの公開競技会には30の都市が、1586年のレーゲンスブルクの競技会には、35の諸都市が参加していた。

このようなイベントを通し、都市間の通商のための友好関係も一層深められていったのである。

II. 国民統合装置としてのドイツ体操祭

1806年のフランスとドイツによるティルジエット条約の締結により、ドイツはナポレオンの支配下に落ちた。ナポレオンは、ベルリンに侵攻するなかで、ブランデンブルク門の上にそびえるあの“クアドリガ”までもパリに持ち帰った。“自らの家を他人の土足で踏みにじられる”ような屈辱をドイツの人々は味わい、祖国統一を希求する国民意識が強く芽生えた。その際、ドイツ語とドイツの伝統的な文化を共有する集団つまりVolkをベースにして、分裂状態にあったドイツを統一国家に構築する思想が興隆した。この祖国統一運動の先導者の一人が、ドイツ体操の父のF.L.ヤーンである。F.L.ヤーンは、彼の著書『ドイツ民族性』(Deutsches Volkstum, 1810)の中で、ドイツのVolkを近代国家を担う正当な成員つまりNationへと仕立て上げるための重要な手段として、Volksfestを位置づけた。このF.L.ヤーンのVolksfest構想が、後年、体操家(Turner)たちの中で具現化したものが体操祭(Turnfest)である。

1816年6月ベルリンの体操場において初めての体操祭が開催され、その後体操祭はベルリン以外にも開催されるようになった。1813年のナポレオンに対する諸国民解放戦争後ドイツにおいてはメッテルニヒの反動体制が浸透していくなか、1817年にはヤーンの祖国統一思想に強い影響を受けた学生たちが、ヴァルトブルク祭を開催し、反動的な書物を火中に投げ入れる事件を起こした。また1819年にはヤーンの信奉者であったイエーナ大学のザントが劇作家のコツェプーを殺害した。このような事件を契機にヤーン思想は体制側にとって危険思想とみなされるようになり、1820年にはプロイセン政府から「体操禁止令」が発令された。この体操禁止令は1842年まで継続し、その間は体操祭は開催されていない。1842年に体操禁止令が解除されると、体操祭も徐々に行われるようになった。1848年と1849年のいわゆるドイツ3月革命期に体操祭は最初の全盛を迎えた。しかし、このドイツ3月革命が未完の内に終焉すると、再度ドイツには反動の嵐が吹き荒れた。体操家の活動は結社法により弾圧され体操祭も一部の地方を除き姿を現していない。1850年代の中頃より、自由主義運動の興隆とともに体操家の活動への弾圧も緩み、体操祭が各地で再開されるようになった。このような体操家の活動に追い風が吹き始めるなか、ナポレオン3世のライン河左岸への侵攻を危惧し、またイタリア統一に刺激され、ドイツにおいても祖国統一運動が興隆した。この祖国統一運動をドイツの領主の中で唯一支援していたのが、ザクセン＝コーブルク＝ゴータ公国の領主エルンスト2世であった。このコーブルクにおいて、1860年、領邦国家群の複合体であったドイツ連邦を横断する全国規模のドイツ体操祭が初めて開催された。続く1861年、1863年と、1870年のドイツ帝国創建によるドイツの統一まで計3回ドイツ体操祭が開催され、さらにドイツ帝国創建後も臣民育成という課題を担いドイツ体操祭は開催された。つまり、初期の頃のドイツ体操祭は国民を統合する重要な「装置」として機能したのである。



<写真-3> コーブルクのエルンスト2世の記念像

ドイツ体操祭が国民統合装置として機能するために、それぞれの体操祭では以下のような「仕掛け」が組み込まれた。

- 1) 1815年のウィーン議定書に基づき誕生したドイツ連邦は、35の領邦国家と4つの帝国自由都市からなる連合体であった。このドイツ連邦を横断する形で、1860年第1回ドイツ体操祭がコーブルクで開催された。この第1回祭典には、ドイツ連邦内の139の諸都市から993名の体操家が、またベルリンで1861年に開催された第2回ドイツ体操祭には、262の諸都市からオーストリアやアメリカからの参加者を含めると2,812名が、さらに第3回ドイツ体操祭には、およそ20,000名の体操家がドイツ国内外から参集した。つまり、ドイツ体操祭の形態自体が、統一されたドイツの姿を表していた。
- 2) ドイツ体操祭の開催日には、愛国心を駆り立てる記念日が選ばれた。第1回ドイツ体操祭は、ワーテルロー会戦（プロイセンを含む連合軍がナポレオンI世に勝利した会戦）の記念日にあたる6月17日から開催された。第2回ドイツ体操祭は、ヤーンの誕生日である8月11日を挟んで開催され、第3回ドイツ体操祭は、ナポレオンに対し勝利した「諸国民解放戦争」の記念日である8月4日を挟んで挙行された。また、1863年が、ライプツィヒ諸国民解放戦争の50周年にあたることから、ライプツィヒが開催都市に選ばれた。
- 3) 黒・赤・金色の三色旗は、祖国統一運動のシンボルであり、第1回ドイツ体操祭では、祭典会場には多数の三色旗が翻り、またシュヴァーベンの体操家はこの三色旗を先頭に掲げコーブルク城内に入場した。第2回ドイツ体操祭では、黒・赤・金色の三色リボンをつけたおよそ4,000名の体操家が祭典行進を行った。第3回ドイツ体操祭では、20,000名が参加した祭典行進を迎えるために、市庁舎の横の塔には黒・赤・金色の巨大な花飾りが取り付けられ、また沿道の柱にもこの三色旗が取り付けられていた。1870年のドイツ帝国創建後のドイツ体操祭では、黒・赤・金色の三色旗に代わって、北ドイツ連邦やドイツ帝国の国旗の色と同じ“黒・白・赤”色の三色旗や三色リボンが翻った。
- 4) それぞれの祭典では必ず、ドイツ全土から参集した体操家の祭典行進が行われた。特に第3回ドイツ体操祭の祭典行進にはおよそ20,000名の体操家が参加し、沿道のおよそ10,000名の観衆を含めおよそ30,000名による祖国統一を希求する一大デモンストレーションが展開された。

- 5) ドイツ体操祭では必ず、団結や連帯感などの団体意識を身体化する集団徒手体操が行われた。第1回ドイツ体操祭では数百名の体操家が、第2回ドイツ体操祭ではおよそ4,000名の体操家が、第3回ドイツ体操祭では7,000名の体操家が、第4回ドイツ体操祭では1,200名の体操家が、第5回ドイツ体操祭では2,016名の体操家が集団徒手体操に参加した。これらの集団徒手体操では、一人の指揮者の号令に基づき、碁盤の目のように整列した体操家が一条乱れず集団徒手体操を実施した。そこには、指揮者の命令に従順に従う「無人称の身体」が、つまり国家権力を支える「臣民としての身体」が表現されていた。また、集団徒手体操には、ベンサムの一望監視施設の原理、つまり“パノプティコン”にみられる「眼差し」による管理が支配していた。体操実施者は碁盤の目のように一人ずつ整列し、一段高いところに位置する指揮者の号令に合わせ一斉に集団徒手体操を実施する。体操実施者の中には、指揮者の高い位置からの「眼差し」により、“心のなかにもう一人の自分”が生まれ、整然と規律正しく体操を行わなければならないという意識が生まれる。このようにパノプティコンと通底する身体管理の原理に基づき、集団徒手体操は実施されたのである。
- 6) 第2回ドイツ体操祭では、F.L.ヤーンによる体操場開設50周年を記念して、ヤーン記念碑の定礎式が、挙行された。この定礎式に際し、デュレの提案でドイツ各地の名所から礎石となる石が持ち寄られ、記念碑の基礎に埋め込まれた。この行為には、分裂状態にあった祖国の統一を希求する体操家の想いが表現されていたといえる。また、第2回ドイツ体操祭では、ビクトリア劇場で舞台鑑賞会が行われた。この鑑賞会では、国民意識を高揚させる絵画の展示や愛国的な歌や詩の朗読などが行われた。鑑賞会のクライマックスとして、体操家マースマンより作詞されたプロイセン国王をたたえる歌が合唱され、その後、緑の木々に囲まれた大理石できた国王の「胸像」が舞台の上に登場し、市議会議員シェファーの音頭で万歳が三唱された。



<写真-4> ヤーン記念碑の礎石



<写真-5> フランスに向かって聳えている“ゲルマニア像”

- 7) ドイツ体操祭では、プログラムとして、ある目的地へ集団で移動し、その目的地で各種の活動を行う体操遍歴 (Turnfahrt) が挙行された。プロイセンが対仏戦争に勝利しドイツ帝国が創建された直後に開催された第4回ドイツ体操祭では、ライン河を汽船で航行する体操遍歴が行われた。ライン河は歴史的にフランスとドイツを隔てる重要な河川であり、この河川を巡って両国は幾度となく

戦闘を繰り返した。第4回ドイツ体操祭で体操家が、ライン河を汽船で航行する体操遍歴を行ったことは、フランスに勝利し、“ライン河はドイツの河川である”ことを表現する行為であった。1880年フランクフルトで開催された第5回ドイツ体操祭では、ライン河沿いのニーダーヴァルトの丘までの体操遍歴が行われた。このニーダーヴァルトの上には、すでに1877年にはヴィルヘルムⅠ世の参列のもと、“ゲルマニア”像の記念碑の基礎が築かれていた。このゲルマニアとは、ゲルマン人としてのドイツを擬人化した戦いの“女神”であり、この戦いの女神は、ライン河を臨むニーダーヴァルトの丘からフランスに向かった聳え立っていた。第4回ドイツ体操祭の体操遍歴では、このニーダーヴァルトの丘の上で、対仏戦争の勝利をたたえる演説などが行われ、その最後に「ラインの守り」が合唱された。

8) ドイツ体操祭では、数えきれないほどの国民意識を増幅させる演説が行われた。その中で代表的な演説を上げるとすれば、第3回ドイツ体操祭の折に行った歴史家トライチュケの演説である。トライチュケは、演説の中で、まず一向に進まない祖国の統一を憂い、このような国家的な祭典は祖国の統一に道を開くべきであり、またそれを実現するために、ドイツ連邦内の諸部族は団結をすべきである、と強く説いた。第5回ドイツ体操祭では、ドイツ体操連盟の会長であるゲオルギーが、皇帝ヴィルヘルムの統治の継続を望む演説を行い、また当連盟の事務局長であるゲッツは、帝国議会においては赤である左翼と黒である中央党が過半数以下のなるように我々は努力すべきである、と説いた。

以上のようなドイツ体操祭における各種の仕掛けをとおし、体操家の中に祖国統一を希求する国民意識や、ドイツ帝国を支える臣民としての意識が増幅されていったのである。

Ⅲ. バイエルン王国における産業振興と国民統合の「装置」として国民祭の開催

1806年、フランスのナポレオンⅠ世の後押しで、バイエルン選帝侯国は王国に昇格した。バイエルン王国は1808年には憲法を制定するとともに、フランスから「県」(Kreis)などの各種の諸制度を取り入れながら、近代国家としての体裁を整えていった。このバイエルン王国において、19世紀初頭から、3つの国民祭(Volksfest)が開催された。まず一つが、1810年のバイエルン皇太子ルートヴィヒとザクセン・ヒルトブルクハウゼンの王女テレーゼの結婚式をきっかけに始まった“オクトーバーフェスト”である。このオクトーバーフェストをモデルにして、1826年からニュルンベルクにおいて“国民祭”が、また1833年から1841年までバンベルクにおいて“テレジエン国民祭”が開催された。

これら3つの国民祭では、主要プログラムが運動競技と農業や畜産を中心とした産業振興プログラムから構成されていた。

1810年のオクトーバーフェストでは、10月12日のルートヴィヒとテレーゼの結婚式にそえるプログラムとして、結婚式当日から21日まで懸賞競射会が開催され、また10月17日にはミュンヘン騎兵隊師団の提案で競馬会が行われた。翌1811年のオクトーバーフェストから、バイエルン中央農業団体が1818年まで、市民たちからの財政支援を受けながら、競馬と家畜市と農業展示会を主催した。1819年からミュンヘン市に市政権が返還されたことから、オクトーバーフェストにおける競技や娯楽的な部分はミュンヘン市当局が、農業祭はバイエルン中央農業団体が主催するシステムとなった。

1833年から1841年まで開催されたバンベルクにおけるテレジエン国民祭の主要プログラムは、<表-1>の通りである。3祭典の主要プログラムは、競技プログラムと産業振興プログラムから構成されていた。

このような祭典上の特色の他に、3つの国民祭は、オクトバーフェスト開催のきっかけからも分かるように、バイエルン王国の国民意識を醸成する機能を担っていた。

バイエルンは、1803年選帝侯国の時代、ナポレオン1世の領地再編政策に基づいて、フランケン地方やシュヴァーベン地方などの新しい領地を獲得し、王宮都市ミュンヘンを中止とした領土の一円化支配に向けての第一歩を踏み出した。バイエルン王国においては、新しく算入された領地の人々に国民意識を植えつけることは喫緊の課題であった。

<表-1> テレジエン国民祭における主要プログラム (1833~1841)

プログラム	1833年 6日間	1834年 5日間	1835年 5日間	1837年 4日間	1839年 4日間	1841年 5日間
祭典行列	○	○	○	○	○	○
競馬	○	○	○			
射撃	○	○		○	○	○
舟上槍突	○	○				
戦車競走	○	○	○	○	○	○
騎士競技	○			○	○	○
運動娯楽	○	○	○	○	○	○
演劇	○	○	○	○	○	
音楽会	○	○	○	○	○	○
貧困者への昼食支給	○	○	○	○	○	○
舞踏会	○	○	○	○	○	○
王室ギャラリー等の公開	○	○	○	○	○	○
家畜市	○	○	○	○	○	○
家畜の表彰	○	○	○	○	○	○
産業展示会	○	○	○	○	○	○
産業展示品の表彰	○	○	○	○	○	○
職人の表彰	○	○		○	○	○
都市役人の表彰	○	○	○	○	○	○
農産物の表彰	○	○	○	○	○	
祭典馬車の表彰	○	○	○	○	○	○

つまり、バイエルン王国への忠誠心や祖国愛を根づかせる国民統合装置が必要であったのである。『オクトバーフェスト公式祭典誌』(Das Oktoberfest 1810-2010, Offizielle Festschrift der Landeshauptstadt München, 2010)において、「領地の中での新しい王家に対する忠誠は自明ではなく、オクトバーフェストによって、1810年以来一つの道具が作られ、その道具によって、バイエルンの王家に対する統一思想が固められ、そして全領土へその思想が運ばれた」と述べられている。また同公式祭典誌では、「広く農業を重視していた王国にとって、家畜や農産物の表彰を伴う展示会は、農業の改善に貢献した」と記されている。また、バンベルク歴史博物館のテレジエン国民祭に関する解説文において、「この祭典の目的は、国民感情や愛国心の強化であり、第二は産業や商業の振興であり、第三が住民のための娯楽である」と記されている。

つまり、バイエルン王国で開催された3つの国民祭は、新しく王位についた王家への忠誠心を植え

込む国民統合「装置」であり、農業や畜産を中心とした産業を振興する「装置」であり、さらには住民たちに楽しみや娯楽を享受する「装置」であったといえる。

3つの国民祭では、国民を統合する装置として、以下のような「仕掛け」が組み込まれていた。

- 1) オクトバーフェストが、1810年10月12日の皇太子ルードヴィヒと皇太子妃テレゼの結婚式をきっかけに始まり、ニュルンベルクの国民祭は、国王ルートヴィヒの誕生祭として、またバンベルクのテレジエン国民祭は、王妃テレゼの誕生祭として挙行された。そのため、オクトバーフェストは、10月12日近くの日曜日から、ニュルンベルク国民祭は、ルードヴィヒの誕生日の8月25日から、バンベルクのテレジエン国民祭は、テレゼの誕生日の7月8日から始まった。
- 2) オクトバーフェストとバンベルクの国民祭では、皇太子妃、後の王妃“テレゼ”に因んで、国王の許可の下、祭典会場が“テレジエン・ヴィーゼ”(1810年から1814年までは“テレゼンス・ヴィーゼ”)と命名された。
- 3) ルードヴィヒとテレゼの結婚25周年にあたる1835年には、オクトバーフェストでは、結婚25周年を祝してイザール管区からミュンヘンまでの86台の馬車を伴う豪華な祭典行進が繰り広げられた。また、バンベルクの国民祭でも、25周年を記念して、王国後備軍のパレードとテレジエン・ヴィーゼでの音楽を伴う“ミサ”が挙行された。
- 4) オクトバーフェストでは、宮殿からテレジエン・ヴィーゼまでの祭典行進が行われた後、国王と王妃が臨席するテントの前で子供たちから敬意を表す26行の詩が朗読された。その26行の詩の頭文字を読むと、“HEIL DEM VATER DES VATERLANDES”、つまり“祖国の父に万歳”という意味になっていた。1820年のオクトバーフェストでは、国王マックス1世・ヨーゼフから、ルートヴィヒとテレゼの結婚10周年の記念して、気球が空高く打ち上げられた。また、バンベルクの第1回テレジエン国民祭の閉会に際し、王妃テレゼを称える詩が朗読され、その詩は「ドイツの真の模範、真の王妃をここにみる」という言葉で結ばれていた。
- 5) 第1回オクトバーフェストでの競馬に出場した少年騎手の全員に結婚記念のために特別に鑄造された金のメダルが授与され、また、市民たちには新郎新婦名が刻印された記念硬貨が配られた。ニュルンベルク国民祭においては、競馬の勝者や優秀な馬の飼育者には、賞金とともに、国王殿下や王妃殿下や皇太子殿下直筆の署名が入った王国旗が授与された。バンベルクのテレジエン国民祭でも、競馬の勝者には、王妃殿下と国王ファミリーの署名入りの表彰旗が授与された。
- 6) オクトバーフェストとテレジエン国民祭では、祭典会場に王家ファミリーのための特別席が設けられ、祭典行進で祭典参加者がその前を通過するとき、必ず旗を3回下へ垂らして忠誠の念を表した。テレジエン国民祭では、テレジアの誕生日に王宮宮殿からテレジエン・ヴィーゼまでの大規模な祭典行進が挙行され、国王と王妃の旗がその行列の中心を形成した。

このようにして、バイエルン王国や王家に対する忠誠心が、参加者や国民になかに刷り込まれていったのである。

つぎに、これらの3つの国民祭においては、産業振興をすすめる「仕掛け」もみられた。

- 1) それぞれの祭典では、競馬が終了するとその直後に、競走馬の飼育を奨励するために、上位の勝者には賞金や賞品が授与された。このような競馬の意味を、1826年のニュルンベルクで刊行された「雑誌」(Unterhaltungen und Mittheilungen von und für Bayern zum Nutzen und Vergnügen.

Jahgang I, Nro. 49.) は、「この祭典は、ニュルンベルクにおける現存する一つの記念碑であり、当地域の優秀な馬の飼育を促進するための発端であった」と記している。また、同祭典のプログラムにも、「可能な限り馬の飼育を奨励するためや、馬の所有者に競走馬の飼育を勧めるために、メインレースでは賞を授与する」と記されたい。ニュルンベルク国民祭のメイン競馬には、15頭の馬が出場し、4頭の馬が違反を犯したために、上位11頭の馬に王国旗と賞金が授与された。1位の調教マイスターは40バイエルン・ターラーを、2位は30バイエルン・ターラーを、3位は20バイエルン・ターラーを、4位は16バイエルン・ターラーを、5位は14バイエルン・ターラーを、6位は12バイエルン・ターラーを、7位は10バイエルン・ターラーを、8位は9バイエルン・ターラーを、9位は8バイエルン・ターラーを、10位は7バイエルン・ターラーを、11位は6バイエルン・ターラーの賞金を獲得している。第2レースにも12頭の競走馬が出場し、上位6頭が王国旗と賞金を手にした。また、バンベルクの第1回テレジエン国民祭の競馬でも、上位12頭の調教マイスターに、25バイエルン・ターラーから3バイエルン・ターラーまでの賞金と表彰旗が授与された。

2) 3つの国民祭においては、馬、牛、羊、豚の家畜市や年の市が行われた。この市に出された家畜の中で、バイエルン国内やそれぞれの地域における家畜の飼育を奨励するため、養育状態のよい家畜は表彰された。例えば、ニュルンベルク国民祭においては、優秀な牡馬や雌馬や牡牛や雌牛や羊の飼育者の第1位には、3バイエルン・ターラーと表彰旗と本が授与された。また、テレジエン国民祭では、4年から5年間飼育した養育状態のよい牡馬と雌馬の飼育者に、賞金と表彰旗などが与えられた。また、家畜市では、売買や交換が行われ、テレジエン国民祭では家畜の売買の際に起こる問題を解決するための仲裁委員会が設けられていた。

3) 農産物や工芸品や手工業製品のための産業展示会が開催された。ニュルンベルクとバンベルクの国民祭では、果実、園芸植物、タバコ、麻、亜麻、ケシやヒマワリなどの農作物の生産を奨励するため、展示会に出品したそれぞれの優秀な生産者は、賞金などにより表彰された。例えば、ニュルンベルク国民祭では、蜂の飼育、果樹栽培、タバコ栽培、亜麻・麻栽培、油脂植物栽培、セイヨウアカネ栽培で成果を上げた農業従事者には、賞金（第1位は、3バイエルン・ターラー）と表彰旗が授与された。また、テレジエン国民祭では、優秀な麦わら＝柳細工工芸品の製作者には、3バイエルン・ターラーと表彰旗と賞状が授与された。さらに第1回テレジエン国民祭では、良質な手工業製品の製作者も表彰されており、船大工、帽子仕立て屋、陶工マイスター、機械製造業者、時計工、製本業者の6名が賞金を獲得している。

4) ニュルンベルクとバンベルクの国民祭では、一人の親方の下で長年勤勉に働いている職人（Geselle）が表彰された。

さらには、これら3つの国民祭は、今日でいう都市を中心とした複合的な「メガ・イベント」であることから、開催都市や近郊都市の住民に多くの娯楽や楽しみを与える機会であり、そのための仕掛けもその中に組み込まれていた。

1) これらの国民祭においては、多くの運動競技が行われた。それぞれの競技の勝者には、賞金や賞品が授与され、参加者に多くの楽しみを与えた。オクトバーフェストにおいても、競馬の他に、1815年には木馬などの器械運動や障害物競走、1816年には銃による円形標的や移動する鹿型標的への射撃、1835年に戦車競走、レスリングや槍投げや石投げや綱登りなどが行われた。また、1850の

オクトーバーフェストは、“オリンピック競技会”（Olympische Spiele）と称され、ギリシャの古い衣装をまとった競技者がギリシャに由来する騎馬競技を実施した。第1回テレジエン国民祭では、運動競技として競馬、中世に由来する馬上槍試合や騎馬競技、射撃、古代ギリシャの戦車競走、船上槍突競技が実施され、それぞれの上位の勝者には、賞金や高価な賞品が授与された。

2) 運動競技の他に、参加者に多くの楽しみを与える各種の運動娯楽やクジが組み込まれた。オクトーバーフェストでは、1816年から“くじ壺”が行われ、運動娯楽として障害物競走や車輪競走など開催された。ニュルンベルク国民祭では、運動娯楽として、卵入れ競争、木登り、円柱登りが行われた。木登り競争の木の上には、銀製ポケット時計、パイプ、ベストの布地、絹のハンカチ2枚、1バイエルン・ターラーがついた旗がぶら下がっており、競技者は登攀し、それらの賞品を奪い合った。テレジエン国民祭でも、ドッグレース、木登り、袋競走、手押し車競走、車輪競走やクジ壺などが行われ、参加者に多くの楽しみや気晴らしが与えられた。

3) これらの国民祭には、多くの観衆たちが参集し、「見る側」にも楽しい時空間を与えたといえる。1810年のオクトーバーフェストの競馬会には、近隣の住民を含め4万から5万の人々が参集した。このような状況であったため、会場であるテレジエン・ヴィーゼも年とともに拡張・整備されていった。1824年と1826年には、市当局は近隣の私有地を買い取り、テレジエンヴィーゼを拡張している。そして1880年代には、拡張されたテレジエンヴィーゼの競馬コースが、楕円形に整備された。また、テレジエン国民祭でも、テレジエン・ヴィーゼにメイン観客席と一般観客席が設置され、入場料が徴収された。このように、多くの人々を引く寄せる国民祭においては、観衆に楽しみを与える「娯楽空間」が整備されていた。

4) これらの国民祭は、祭典訪問者に飲食の楽しみを与える機会を提供した。1810年10月12日のルートヴィヒとテレゼの結婚式の翌日、ミュンヘン市内の6,000名の上流市民が、王宮政府からレストランに招待され、ダンスや飲食を楽しんだ。また同日、一般市民にも、穀物市場や遊歩道などにテーブルとベンチがおかれ、飲食物がふるまわれた。その後のオクトーバーフェストの会場でも、飲食のための屋台が出店された。1825年の時点で、18人のビアホール店主とビール醸造者とそして4人の飲食店主の出店が、ミュンヘン地方裁判所から許可され、飲食物の販売が行われた。ニュルンベルク国民祭においても、祭典会場に従軍商人の屋台や各種の飲食店が設営され、また、テレジエン国民祭でも、テレジエン・ヴィーゼには、飲食店や売店や賭博場やクジ壺が設けられた。このような飲食物の提供をとおし、祭典としての“楽しい雰囲気”が盛り上げられた。

これらの国民祭では、バイエルン王国の国民としての意識を醸成するために、農業や畜産や手工業などの産業振興を振興するために、多くの人々に楽しみを気晴らしを享受するために、多くの訪問者を国民祭に引き寄せる必要があった。そのため、最も遠くから祭典を訪問した自治体には、「遠距離賞」（Weitpreis）が授与された。また、テレジエン国民祭では、綺麗に祭典馬車を装飾した自治体にも賞金と賞品が授与された。

結びにかえて

14世紀から中世都市が主催した公開競射会は、中世の大運動会と称され、他の諸都市からも多くの

人々が参集し、都市間の友好関係を深める装置として機能した。この公開競射会は、30年戦争のため一旦は中断を余儀なくされたが、その後は18世紀まで継続し開催された。この公開競射会の基本的祭典構造は、FLヤーンの国民祭構想や、さらにはドイツ体操祭にも受け継がれていった。体操祭は、言語と文化を共有するドイツ民族=Volkを近代国民国家の国民=Nationに仕立てる国民教育の手段として位置づけられ、特に1860年から開催されたドイツ体操祭は、ドイツ連邦を横断する国民統合の装置として、さらには1870年のドイツ帝国創建後は、臣民を育成する装置として大きな役割を果たした。一方で、ナポレオン1世の後押しで王国へと昇格したバイエルン王国においては、1810年からミュンヘンでオクトーバーフェストが、1826年からニュルンベルクで国民祭が、1833年からバンベルクでテレジエン国民祭が始まった。これらの国民祭は、創建直後のバイエルン王国においては、国民としての忠誠心を醸成する装置として、また農業や畜産や手工業などの産業を振興する装置として、また開催都市やその近郊の住民に娯楽を与える装置として機能したといえる。

次にこれらの中世と近代を代表する3つの祭典を熟視すると、①都市を中心とした祭典であり、②都市当局が財政的支援を行い、③都市周辺に祭典会場が設営され、④祭典は数日間継続し、⑤他の都市からも多くの人々が参集し、⑥大規模な祭典行進が行われ、⑦期間中都市内は美しく装飾される、という点で3つの基本的祭典構造は一致している。ここに、中世の運動祭から近代の運動祭への連続性が確認できる。

次に、娯楽性という点で3つの祭典を比較してみると、中世の射撃祭とバイエルンの国民祭には参加者に楽しみを与える娯楽的要素が盛り込まれていたが、国民教育の手段とし位置づけられたドイツ体操祭にはほとんど娯楽的要素は見当たらない。ドイツ体操祭は、「祭り」というよりは、「真面目な式典」という意味合いを多くもつ祭典である。

産業振興という点では、中世の公開競射会は、都市間の友好関係を深め商業活動の振興を図ることを目的とした祭典であり、バイエルンの国民祭は、重農主義の影響をうけ農業や畜産業や手工業の振興を図ることが祭典開催の一つの狙いであった。それに対し、ドイツ体操祭には、産業振興の要素は全く見当たらない。

ナショナリズムという観点では、ドイツ体操祭には、ドイツ語とドイツの伝統的な文化を共有するVolkを中心にして祖国の統一を希求するナショナリズムが存在したが、バイエルンの国民祭には、祖国の統一を突き動かすナショナリズムではなく、バイエルン王国への忠誠心を醸成するナショナリズムが支配していた。中世の射撃祭には、ナショナリズム的要素は全く見られない。

中世の射撃祭と近代のドイツ体操祭と国民祭には、以上のような相違点と共通点が見られ、それぞれの祭典の特色を表しているといえる。

つまり、中世と近代の3つの祭典では、その基本的祭典構造は類似していたとしても、その装置の中に組み込まれる「仕掛け」によって、祭典はいろいろな「顔」を表すのである。

今日のオクトーバーフェストやドイツ体操祭や射撃祭においても、社会に向けての新たなメッセージを発信するような「仕掛け」を組み入れるような努力が、必要ではないであろうか。

<主な史料>

- 1) Deutsche Turn-Zeitung, 1856-1880.
- 2) Stadtarchiv Bamberg, Rep. BS Text, Nr. 8435/1,2,3,4,5,6. 1833-1841.
- 3) Stadtarchiv Bamberg, Rep. C2XV, Nr. 963. 1833.
- 4) Stadtarchiv Nürnberg, Bestand; C7/1-Generalregistratur, Bestellnummer; 10322.
Betreff; Das große Volksfest am 25. August 1826 und in den folgenden Jahren Bd.,1.
1826-1833.

<主な参考文献>

- 1) Theo Reintges, Ursprung und Wesen der spätmittelalterlichen Schützengilden, 1963, Bonn. ; Rheinisches Archiv, Band 58.
- 2) Zieschang, K., Vom Schützenfest von Turnfest, Die Entstehung des Deutschen Turnfestes unter besonderer Berücksichtigung der Einflüsse von F.L. Jahn. Hamburg, 1977.
- 3) Florian Dering, Ursula Eymond, Das Oktoberfest 1810-2010, Süddeutsche Zeitung, München, 2010.
- 4) Brockhaus Enzyklopädie, Bd. 15, Mannheim 1992.
- 5) Karl Lennatz, Das Münchener Oktoberfest – ein Ursprung der Olympischen Spiele !.
Wassong, S., (Hg.), Internationale Einflüsse auf die Wiedereinführung der Olmpischen Spiele durch Pierre de Cobertin, Schorndorf, Kassel, 2005.
- 6) Michael Krüger, Körperkultur und Nationsbildung – Die Geschichte des Turnens in der Reichsgründungsära – eine Detailstudie über die Deutschen, Schorndorf, Köln, 1996.
- 7) 松尾順一著、『ドイツ体操祭と国民統合－近代ドイツにおける全国体操祭に関する史的研究（1860-1880）』、創文企画、2010.
- 8) 松尾順一著、「バンベルクにおけるテレジエン国民祭（Theresien-Volksfest）に関する一考察－運動競技と産業振興が融合した国民祭－」、谷釜了正教授退職記念論集刊行会編 『スポーツの歴史と文化の探求』、明和出版、2017、1-19頁。

（本総説は、平成30年1月16日に行った最終講義の内容である。）